

白いやう

笑に厚し

朝六候 氣登三十三度

玄燭を分けてやりて

降つてやれぬ雨の雨で

相乗るすてはハリん 白い花を咲かせ

ふくえんとは細い 雨のくまに

かすきついで

そんなとやめて

と云つても 知らぬなり

これだけ 知りなく

何しろ 分るが

あやむい 花のころ

いろ

植物の 世界でも

おし 行く

私は 行く

浮し 悲しい 朝

笑し 自由

何と 木が

